

Title	準体法と形式名詞「コト」：狂言資料を中心に
Author(s)	莊司, 育子
Citation	大阪外国語大学論集. 26 p.215-p.231
Issue Date	2002-03-22
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79882
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

準体法と形式名詞「コト」 ―狂言資料を中心に―

莊 司 育 子

A Study of Pseudo-Nominalization and Functional Word 'Koto'

SHOJI Ikuko

It has been recognized that *rentai-kei*, or adnominal form of verb, could become a kind of noun itself in the past. 'Sakeru' in the phrase 'sakeru-wo', for example, appears as a noun in grammatical construction. This use of *rentai-kei* has been called *juntai-bou*, in other words, pseudo-nominalization.

'Koto', which existed as a nominalizer, also flourished as well as *juntai-bou* in those days. What has to be noticed is that both *juntai-bou* and 'koto' had a common function to nominalize a verb, although each nominalization had been done by different motivation. While 'koto' has only the general function of nominalization, *juntai-bou* has a peculiar function to make ones imagine the situation pertaining to the content of speaking.

Juntai-bou has already disappeared in modern Japanese except several idioms. That is due to particles, because their effect to converge the declaration has weakened. It is considered that all particles have the function of convergence; they could make the declare of verb complete and converge the declaration. As for *juntai-bou*, it is the particle that nominalize a verb, and *rentai-kei* must not be a noun, but a verb to the last.

This interpretation for particles may account for many grammatical structures. Convergence by particles applies not to only *juntai-bou* but to some expressions which can be seen in modern Japanese. For instance, particle 'wa', which is recognized as a topic marker, permits to follow various forms of words. These phenomena indicate that 'wa' has high degree of convergence, and that is why there exist more 'wa' expressions using *juntai-bou*.

1. はじめに

古代語では一般に「言ふは易し、行ふは難し」「煩はしきを厭はず」のように、動詞・形容詞の連体形が、それだけで名詞に相当するような形で用いられていた。山田孝雄氏⁽¹⁾はこのような「言ふ」「行ふ」「煩はしき」を、体言に準ずるものということで「準体言」と呼んでいる。本稿ではこのような連体形の体言的用法を、先学に倣って「準体法」と呼ぶことにする。

準体法における動詞の連体形は、そのままの形で名詞に相当するため、その後に格助詞「ガ」「ヲ」や提題を表す助詞「ハ」などが付いて述語に対する補語となる。このような現象は古代語だけに限られているわけではなく、現代語においても、例えば「負けるが勝ちだ」「さあ、とっとと行くがいい」というような類のものがよく聞かれる。これらの文中の動詞「負ける」「行く」は、準体法による例だと言ってもよいであろう。ただ、このような現代語の例は、古代語に比べるとそれほど多いとは言えず、古くから伝わる言い回しやいくつかの慣用的な表現に限られており、いくらでも自由に作り出せるわけではない。準体法は中世末期頃より徐々に衰退しはじめ、現代語では完全に、準体助詞あるいは形式名詞などと呼ばれる「ノ」、そして「コト」「モノ」を用いる表現に取って代わっている。

本稿ではこのような背景をふまえて、そもそも準体法とは何故に成立していたのか、そして形式名詞「コト」との関連から、準体法をどう説明するのがより適切なのかについて考察してみたものである。

2. 準体法における連体形の解釈

中古では盛んだった準体法が徐々に衰退していき、代わりに準体助詞「ノ」が用いられるようになっていく経緯については、これまでに数々の調査研究がなされている。文法史上の大きな変化のひとつ、終止形・連体形の合一化が、準体法衰退の引き金になっているという見方も随分されていたようであるが、その後の調査で、準体助詞「ノ」の出現との時期が一致しないなどで、終止形・連体形の合一化が準体法衰退の直接の原因であるとするのは難しいようである。ただ、無名詞体言句（「白く咲けるを」）が準体助詞体言句（「白く咲いているのを」）に取って代わる現象について言うと、それは、「ノ」を用いることにより、連体形が持っている二つの役割、つまり、連体修飾機能と体言であることの機能を、分担させることによって明確化し、論理化をはかっているのだという考え方がある⁽²⁾。これは、まさに今日に至るまでのさまざまな文法の歴史的変遷における合理化、論理化現象を思うときに、概ね首肯に値するものと思われる。

ところで、従来の先行研究では準体法について言及するとき、管見によれば、その用言の連体形自身そのものが体言あるいは体言相当の語である、という解釈をしている。例えば、「白く咲けるを見る」という場合の「咲ける」は体言（あるいは準体言）である、という解釈は通説になっている。

しかし、果たして「咲ける」自身が本当に体言であると言っていいのだろうか。確かに、格助詞「ヲ」に承接しているという結果から見れば、体言だと言っても間違いではないだろう

う。ただ、「咲けることを」のように「コト」に承接した表現と比較して議論するときには、「咲けることを」の「咲けること」は確かに体言であると言ってもいいが、準体法「咲けるを」の「咲ける」についても同じようにそれが「体言である」と言うのは、どうにかして避けるわけにはいかないものかと思うのである。それは、表現方法として「コト」を使った表現が一方では存在するのに、あえて準体法の表現を選択しているという事実に対して忠実に解釈したいと思うからである。「白く咲けるを」の「咲ける」は、本来の動詞が持つ叙述的な側面を決して欠いているわけではない、つまり、渡辺氏⁽³⁾の言っておられる「統叙」の機能以上に過ぎたところはないのではないかと思われる。

今となっては古代語における文の内省は十分には利かないので、現代語を例にとって考えてみたい。例えば「負けるが勝ちだ」と言うときの「負ける」は、その文の発話の過程を直感的に分析したときに、どうしても、「負ける」がいわゆる「勝ち負け」の「負け」という名詞ほどには、名詞であるとは思えないのである。「白く咲けるを見る」においても、見たものは紛れもなく確かにその白い花であろう。この文を「白く咲ける花を見る」と言い換えたとしても、要するに白い花を見ているということには違いなく、発話内容の現象そのものは同様であると言ってもいいかもしれない。しかし、ある同一場所、同一時間において起こった現象に対して話者が表現した二つの文、「咲けるを見る」と「花を見る」が、同一の現象について言い表した文だからと言って、この二文までもが同じ表現意図を表すというのはいかなものかと思われるのである。

準体法には準体法ならではの表現効果があること、例えば、日本人的嗜好の「あいまい性」を有する、ということは先行研究でも指摘されている⁽⁴⁾。また、柳田氏の説⁽²⁾によると、準体法でしか成し得ない機能として、煩雑を回避することができること、そして、連体形の後に本来補われるべき名詞が、先行あるいは後行することを示唆するということを挙げておられる。

柳田氏の『天草版伊曾保物語』からの例、

- (1) 含んだ肉の影が水の底に写ったを見れば
 - (2) 大切な者と仰せらるるは平生ご秘蔵なさるこの犬の事でござらうずる
- これらが次のように、

- (3) 含んだ肉の影が水の底に写った肉の影を見れば
- (4) 大切な者と仰せらるるものは平生ご秘蔵なさるこの犬の事でござらうずる

となれば、(3)では「肉の影」が重複していて煩雑である。また『天草版伊曾保物語』では無名詞体言句（いわゆる準体法による句）の多くが、名詞先行出現体言句か名詞後行出現体言句のどちらかであるという調査結果をもとに、「その表わす体言が、既に前に出てきたものであるということ、またはこれから後に出てくるものであるということを表わすはたらき」が、形式名詞を使った(4)では半減してしまうということである。連体形の後に来るはずの名詞が先行、あるいは後行しているという事実は、言語現象としては確かにそうであるが、このことはむしろ、「白く咲けるを」と「咲いている白い花を」の発話者の表現意図の違いが、あくまで形として反映された結果に過ぎないものであると思われる。

では、準体法には準体法によってのみ表しうる発話者の表現意図とその効果を有していたとするならば、それは一体何であろうか。それは、聞き手（読み手）に、その表す叙述内容の場面の想起を誘う作用であると考えられる。

(1) 含んだ肉の影が水の底に写ったを見れば

という表現は、ヲ格の後に「肉の影」という名詞をあえて表出しないことで、その「肉の影」ばかりか、「(肉の影が) 水の底に写っている」という場面・内容をも、聞き手（読み手）に、より臨場感をもって思い起こさせる表現なのだと考えられる。「写ったを」のように、「写った」と言いきりのままで止めて、何か物足りないような余韻を残すという手段を使うことによって、言語形式の上で具現していない表現上の意図を暗示することに、成功しているように思われるのである。

これまでの先行研究で準体法を記述する際に、連体修飾の構文の観点から、大きく同格準体（寺村氏⁽⁵⁾で言うところの「外の関係」）と同一名詞準体（同「内の関係」）のどちらかに分類することから始まっているものがある⁽⁶⁾⁽⁷⁾。ところが、実際の言語現象では(5)のような例はいくらでも出てくる。

(5) かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常より物思ひたるさまなり（『竹取物語』）

これらの先行研究の中で、下線部「月のおもしろく出でたる」は「おもしろく出ている月」（同一名詞準体）なのか、「月のおもしろく出ている様子」（同格準体）なのか、判断に迷うことが多いとされ、問題点として挙げられている。

しかし、実際この問題は、準体法を現代語に存在する構文で捉えようとすることに起因すると考えられる。既に述べたように、準体法には準体法ならではの効果、つまり、その表す叙述内容の場面の想起を誘う作用がある。したがって、「月のおもしろく出でたる」が指している内容は、「月」でもあり、「様子」でもあるのであり、それは、今や準体法を用いない現代語には醸し出せない効果であると考えられるのである。

以上のようなことから、従来の準体法における連体形の解釈において、「白く咲けるを」の「咲ける」を「体言である」とする説明は避けたいのである。「咲ける」はあくまでも用言としての機能を持ち続けたうえで、「白く咲けるを」が成立していると考えたい。しかし文法体系から見れば、「白く咲けるを」の「咲ける」には、体言句を承ける格助詞が承接している。そこで、この問題について解決しなければならない。

3. 助詞による「収束」

ここで、準体法を成立させている構造・形式上の要因について考えてみたい。動詞の連体形に助詞が承接する準体法は、実は、他でもない、その連体形に後続する助詞の存在によるものであり、助詞抜きでは準体法は成立しないのではないかと考えられる。

つまり、「白く咲けるを見る」については、動詞が持つ「咲ける」という動作性概念をそのまま格助詞「ヲ」が承けて、承けると同時にその「ヲ」が、前接の「咲ける」を、いわゆる体言的概念に変え、そして「咲けるを」というヲ格体言句が「見る」の連用格となって「見る」にかかっていく、という具合である。「咲けるを」の「咲ける」は、あくまでも用言、動

詞の連体形なのであり、体言ではない。「白く咲ける花」と言ったときの「咲ける」と同様に、「咲ける」は、あくまで被修飾語であるところのものに向かってかかっていく形態だと思われるのである。したがって、準体法「咲けるを」の場合、「咲ける」の被修飾語が助詞「ヲ」であると言ってもいいかもしれないが、格助詞「ヲ」には、前接するものを承けて、述語へかかっていくという重要な機能、つまり、渡辺氏⁽³⁾の言う「展叙」を担っているから、通常の被修飾語である体言句そのものとは同列には扱い難い。そこで、このような助詞がもっている機能語としての役割について再考したときに、助詞は「展叙」に加えて、「収束」という機能を有しているのではないかと考えられるのである。

助詞による収束とは、すなわち、その助詞に前接するものを引き承けて、それをそれ以上展開しないまとまった一つ概念に包括する、ということである。つまり、「白く咲けるを見る」では、助詞「ヲ」がもつ収束力によって、用言「白く咲ける」をそれ以上展開しない一つ概念にまとめ上げ、そしてさらに「見る」という動詞にかかっていくという機能を果たしているというわけである。

このような助詞の収束力は、準体法の例に限ったことではない。現代語における以下のような文例における下線部の助詞にも共通している機能である。

(6) 今日は何時に帰って来られるかわからない。

(7) 着いたら連絡をすると言っていた。

上記の例における(6)は疑問の助詞「カ」、(7)は引用の助詞「ト」と言われるもので、補文化辞とも呼ばれているものである。これらの助詞は、「今日は何時に帰って来られる」「着いたら連絡をする」という述語文を包括し、一つの体言相当句にまとめ上げる役割をしていると言われるものである。「今日は何時に帰って来られる」「着いたら連絡をする」は体言句である、というのが一般的な解釈だと思われるが、本稿ではあえて「体言」句と言うのは避けたい。なぜなら、既に述べたように「今日は何時に帰って来られる」「着いたら連絡をする」自体が体言なのではなく、これを体言句のようにしているものは、まさに「カ」「ト」という助詞だからである。「カ」「ト」の助詞のもつ収束力によって「今日は何時に帰って来られる」「着いたら連絡をする」は、体言句ではなく、それぞれ一個の包括された概念となっているだけであり、これらの述語文には多分にして叙述を表す用言の機能を有しているのである。

では、なぜ中古では盛んだった準体法が衰退し、形式名詞「ノ」「コト」に取って代わられたのか。その原因の一つは、助詞による収束力の弱化ではないかと考えられる。つまり、本来有していた助詞の機能に減退が生じたのである。減退の経緯としては、例えば、以前は用いられることのなかった主格の助詞「ガ」が出現しはじめ、格助詞はもっぱら格関係の明示に専念するようになったという具合に、全般に言語構成上の論理化、合理化が図られていく過程に沿う、一連の現象に付随するものだと思われる。

4. 形式名詞「コト」

ところで、準体法における連体形が、それだけで体言となる性質をもっているとする説明を避けたいもう一つの理由として、形式名詞「コト」の存在が挙げられる。動詞「見る」か

ら「見ること」という語形式が作れるように、「コト」は、動作性概念を文法的に体言化する手段として用いられる。「コト」の使用は『万葉集』や『竹取物語』にまで遡ることができ、古くからの体言化の常套手段であったと言ってもよい。

(8) 萬代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし (『万葉集』5・830)

(9) 翁、竹を取る事久しくなりぬ (『竹取物語』)

例に挙げたような「絶ゆること」「取る事」も、動詞連体形が無条件に体言相当になれるならば、なぜ、このように「コト」を用いたのか、「絶ゆるゆなく」「取るゆ久しく」では成立しなかったのかという疑問が浮上する。準体法が一般的であった時代に、一方で形式名詞「コト」で用言の体言化が普通に行われていたということは、少なくとも、「動詞の連体形はそれだけで体言になれる」というような準体法についての説明は、きわめて不十分であることがわかるのである。

そこで、準体法には準体法の存在意義があったように、また、「コト」には「コト」にしか担えない体言化の用法があったのではないかと思われる。そこで、ここでは「コト」で括られたものはどんな性質を帯びたものだったのかについて考えてみたい。

以前に拙稿⁽⁸⁾で、狂言虎寛本における形式名詞「コト」の使われ方を考察したことがある。狂言資料は、中世における言葉の使用状況を大いに反映していると考えられているものであり、また、作品の性格上、当時の口語にあたるものが多く、現代語の萌芽となるべく要素も兼ね備えた資料である。

この資料からわかったことは、当時「コト」を用いることによって、単に文法的に体言化するだけでなく、多分に、さまざまな表現意図を表そうとしていたのではないかということである。それは、現代語から見れば、過剰ではないかと思えるほど多様な「コト」の使われ方がされていたことからわかる。

(10) 明日はつゝと晴な事じやに依て、手間の取る分はくるしう無い程に、随分念を入れてゆふて呉れい。／私も随分と念を入る事で御ざる。(「麻生」)

(11) 扱々きどくな事じや。そなたの聲はすれ共、中へ見えぬ事でおりやる。(「隠笠」)

(12) 扱もへ 奇特新事じや。我と我姿が曇り霞もなう有々と見ゆる事じや。(「鏡男」)

(13) はて合點の行ぬ。都では出たが、何として出ぬ事じやしらぬ。(「寶の槌」)

(14) 早う着て見せい。／心得ました。着まする内必こちを見させらるゝな。／見る事ではない。(「隠笠」)

(15) 扱今日は、何と寒い事では御座らぬか。／ 誠に此間に無い寒い事で御ざる。

(「船渡駕」)

「コト」は「コトで御座る」「コトでおりやる」「コトじや」などの文末表現で頻繁に現れるのが特徴であり、文全体の意味を考えた場合、さして「コト」を使って体言化するほどの必要性があまり感じられない。(10) では、念を入れて髪を結ってくれという主人に対して、私も「念を入れております」、(11) では、声は聞こえるけれども姿は「見えない」、(12) では、鏡を見てありありと「見える」、(13) では、どうして「出てこないか」わからない、(14) では、着ている間はこちらを見ないようにと言われたのに答えて、「見ない」、(15) では、何と

寒いんでしょう、というのに答えて、本当に「寒いです」、と解釈できるので、現代語から見ると、むしろ「コト」で体言化してしまう方が不自然に聞こえるのである。

また (16) の例のように「コトはならぬ」という形式で禁止を表したり、現代語にもあるような経験を表す (17) のような用法も見える。

(16) 扱も〽、見ればみる程見事な有の實じや程に、遣る事は成らぬ。(「連歌毘沙門」)

(17) 百姓の事で御座れば、終に歌などを詠うだ事は御ざらぬ。(「三人夫」)

これらの「コト」の使われ方から言えることは、一つは、あえて準体法によらないで、「コト」を積極的に用いているということであろう。このような例がある一方で、

(18) 其笠を着れば余人の目に見えぬがきどくでおりやる。(「隠笠」)

(19) イヤ申、えぼし髪のむつかしいはこゝで御座る。(「麻生」)

という例が見られるように、準体法はまだ健在の時分である。それにもかかわらず用いられる「コト」というのは、例えば「コトで御座る」に代表されるように、体言化するという機能に加えて、何かしらの表現意図が加わったものと考えられるのである。このことは、同列に扱っていいのかは多少疑問ではあるが、現代語にもしばしば見られる文末の「コト」を思い起こしたときに、幾分通じるものが見えるかもしれない。

(20) まあ、なんてかわいらしいこと。

(21) 可燃ゴミは火曜と金曜に出すこと。

上記のような「コト」は、感動、詠嘆を表すとか、指示、命令を表すなどと言われるものである。「コト」という、一見して実質的な意味をもたない極めて形式的な語形式を用いるだけで、このように話し手の主観性が如実に現れるような表現になってしまうことが大変興味深いのであるが、このような意味がなぜ「コト」から読みとれるのか。前に述べた「コトで御座る」「コトでおりやる」「コトじや」などの文末表現で頻繁に「コト」が用いられていたことと関係があるのではないだろうか。

それは、「コト」が前接する用言に対して、より積極的に体言化を働きかけることによって、このような多彩な表現意図が生み出されるのではないかと考えられるのである。極端な言い方をすれば、「コト」の本務は積極的な体言化そのものである。不自然なまでに「コト」で体言化されていた狂言の例からもわかるように、用言を体言の概念にまとめ上げること、このことがまさしく形式名詞「コト」の機能であり、そうすることで、その後にさまざまな表現意図が生じる。多彩な「コト」の表現の意味は、その「コト」による体言化の作用の副産物のようなものであると考えられるのである。

すると、準体法において起こっていることは、助詞の作用によって用言の展開を止める「収束化」であって「体言化」ではないと言える。すなわち、いわゆる「体言化」は、形式名詞「コト」によって行われている機能なのである。

5. 補語における用言の体言化

文はどのようにして構成されるのか。渡辺氏⁽³⁾の用語を用いるならば、文は「展叙」、「統叙」、「陳述」によって成立する。用言は本来、「統叙」における役割が主たるものだと考えら

れるが、時として「展叙」の部分においても用いられることがある。別の言い方をすれば、用言は文の述語に対する補語として用いられることがあるというわけである。ではそのとき、用言はどのような形式をとるのだろうか。ここではこれまでに見てきた準体法による効果と形式名詞「コト」による機能との関係から考えてみたい。

例えば現代語の場合、格助詞によって導かれ、「花が咲く」「見たことを／見たのを伝えた」のように名詞、あるいは名詞句が補語となって、それぞれ「咲く」「伝えた」という述語にかかっていく。補語になる資格として、名詞、あるいは収束された一つのまとめ上げられた概念が必要なのである。「花」などの名詞の場合は、それだけで十分に具体的な事物を指し、一概念を形成するに値するが、「見た」などの動詞述語は「花」と比べると対照的な概念をもつものである。「花」が「静的」で「物的」であるのに対して、「見た」は、「動的」で「事的」とでも言えるかもしれない。それで、「見た」は補語となるべく、より「花」のように「静的」で「物的」に表す必要があるために、「コト」あるいは「ノ」という形式名詞を使って、体言化をはかるのだと考えられる。

用言が補語に用いられる場合には必ず体言化が必要だということは、古代語においても同様であり、それゆえに準体法による連体形が体言であるという言い方がされてきた。しかし、第3節で見たように、準体法による現象は助詞の収束力によるものであり、動詞そのものが体言なのではないこと、そして準体法による表現には、「コト」を用いた表現では見られない表現意図が含意されているために「体言化」という呼び名が憚られる、それで助詞によるものは「収束化」と呼ぶということを述べた。

そこで、準体法が一般的だった頃、用言が補語となるための手段としては二つの選択肢、つまり「コト」による体言化か、あるいは助詞が承接する収束化の二つがあったことになり、どちらかが満たされなければ用言は補語になれないということになる。この予測はこれまで見てきた数々の文例が示すとおりであり、助詞かあるいは「コト」が付いているものがほとんどであることがわかる。

(22) この翁は、かぐや姫のやもめなるを歎かしければ、(『竹取物語』)

(23) 舟の行くにまかせて海にたゞよひて、(『竹取物語』)

(24) かたじけなく、きたなげなる所に、年月をへて、物し給ふ事、極まりたるかしこまり
(『竹取物語』)

(25) さだかに作らせたる物と聞きつれば、返さむ事いとやすし (『竹取物語』)

上記の例では、(22)「やもめなる」(23)「行く」は、それぞれ「ヲ」「ニ」という助詞をもって用言を収束させ、尚かつ、その格助詞によって述語との格関係を表している。また、(24)「物し給ふ」(25)「返さむ」の場合は、「コト」による形式名詞によって体言化され、補語の資格を得ている。述語との格関係は明示されていないが、もともと今日のような主格、主体を表す「ガ」「ハ」が発達したのは遅かった。このことは形式としては具現しないゼロ形式でもって、述語との意味関係を示していたとも言えるだろう。したがって、例えば (25) では「返さむ事いとやすし」の他に「返さむはいとやすし」としても文法的には容認されるが「返さむゆいとやすし」は許容され難いのではないか。実際、形容詞述語文の場合は、「雨

が多い」「逢うのが難しい」などのように現代語ならば必ず補語にガ格を取るが、古代語では「雨多し」「逢ふこと難し」「泣くこと限りなし」のようにガ格は具現しない。そして、このような場合、ほとんどと言ってもいいくらい、補語には「コト」が使われており、「逢ふ ϕ 難し」「泣く ϕ 限りなし」という形は見られない。これはおそらく、格表示としての助詞の機能はゼロ標識でも果たしうるのだが、収束化という助詞の機能までは、助詞が顕現しない限りは難しかったからではないかと思われる。

しかしながら一方で、準体法の先行研究の記述の中で、助詞も「コト」も付いていないような例がいくつか挙げられている⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。下記の例は、形容詞述語文ではないが、確かに助詞も「コト」も付いていないものである。

(26) あるひとのこのわらははなる、ひそかにいふ (『土左日記』)

(27) 一人はいやしきをとこの貧しき、一人はあてなるをとこもたりけり (『伊勢物語』41)

(28) この夕秋風吹きぬ白露にあらそふ萩の明日咲かむ見む (『万葉集』10, 2102)

(29) 大船のたゆたふ見れば慰むる情もあらぬ (『万葉集』2, 196)

しかし、このように助詞も「コト」も付いていないものは、ガ格、ヲ格を担うものに限られているようである。現代語における格助詞について言うならば、数々の格助詞の中でも「ガ」と「ヲ」は動詞との結びつきが強く、格助詞の序列の中では一、二位を争うことは、既に数々の言語現象から指摘されているところである⁽¹¹⁾。それは、極端な言い方をすれば、「ガ」「ヲ」と、それ以外の格助詞「二」「へ」「で」「カラ」「マデ」などとの間には、一線を画することができるほど力関係に差が認められるのである。

例えば「子供が遊んでいる」「写真を撮った」から、それぞれガ格、ヲ格が被修飾語となった連体修飾節「遊んでいる子供」「撮った写真」が言えるのに対し、「母から話を聞いた」「京都まで切符を買った」という「カラ」「マデ」から作られた連体修飾節「話を聞いた母」「切符を買った京都」では、元の述語文が復元できない。

また、日常の口頭表現において助詞がしばしば省略されることがある。しかし、そのとき無条件に省略できるのは、ガ格、ヲ格に限られる。その他の格助詞は場面や文脈に依存するところが大きい。「ゆうべ、ポチ ϕ ごはん ϕ 食べなかつた」という文と「地震 ϕ お皿 ϕ 戸棚 ϕ 落ちてきた」(地震でお皿が戸棚から落ちてきた)とを比べれば、解釈の面で明らかに後者が劣る。恐らく「地震でお皿 ϕ 戸棚から落ちてきた」までが許容の範囲であろう。

これらに関連することは先行研究で既に多く指摘されていることなので、一々挙げることはしないが、つまるところ、ガ格、ヲ格は具現しなくとも、その動詞との格関係が不明となることはなく、安定した強い結びつきがあるということである。

したがって、(26) (27) (28) (29) は、当時具現しなかったゼロ形式のガ格、ヲ格が、何らかの理由で何とか収束化を発揮したものと言っていいであろう。ちなみにこのような例は、(28) (29) に代表されるような「見る」を述語にとるものが多いようである⁽⁹⁾から、「見る」の動詞独自が持つ別の要因が、収束化を助けたのかもしれない。

また、(26) のガ格の例を見ると、このような表現をあえて用いた意図として、英語の関係節の用法が思い浮かぶ。英語の関係節の用法には、制限的(限定的)用法(‘The pretty girl

who is typing over there, is my wife.’) と非制限的(継続)用法(‘The pretty girl, who is typing over there, is my wife.’) というものがあるとされているが、まさにその違いにも似たような印象を受ける。おそらく、叙述内容の場面を想起させたいという意図をもって、準体法で表したいのだが、主格の「ガ」を明示することが発達していなかったというやむにやまれぬ理由で、このような表現が使われていたのだと考えられる。

また、蛇足ながら念のため付け加えると、表現意図の観点からは、助詞も「コト」も付いている例はどのように解釈できるか。

(30) 御門、かぐや姫を止めて歸り給はんことを、あかずくちをしく覚えしけれど、

(『竹取物語』)

(31) かたき事どもにこそあなれ。この國にある物にもあらず。かくかたき事をば、いかに申さむ(『竹取物語』)

例えば(30)では、「歸り給はん」を積極的に体言化したために「コト」を用い、そして述語との意味関係を明示する「ヲ」を付けたと考えられる。(31)では下線部より前に既に「かたき事」という同一の内容のことを示す語がありながら、さらに下線部でも「コト」を用いた表現が使われていることから、「かたき事」と言うことで積極的に一概念化したものを要求したかった、それゆえ「かたき ϕ をば」の「かたき ϕ 」とは区別して用いたかったと考えられるのである。

「コト」で括られるものは、発話時の時点で、積極的に、動作概念を一名詞概念で捉えたいという文法上の意図的操作であると言える。「コト」で括ってしまった名詞概念は、後になって文法上、影響を及ぼしたりそれ以上に展開したりしないし、またその必要性もない。その場限りの発話時の時点で名詞相当になっていれば、文構成の役割は果たし終えるのである。このことを厳密な意味で「体言化」と言うならば、文法上、体言化は形式名詞「コト」や「モノ」によって行われるのであり、準体法とは異なるのだと言える。

6. 種々の助詞による「収束」

準体法が、助詞の収束力による現象だということは既に述べた。収束はすべての助詞に共通して持っている機能だと思われるが、本稿では準体法に関わっている助詞について取り上げ、検討を加えることにしたい。以下では、助詞による収束化の実際について、狂言資料をもとに具体的に見てみたいと思う。

6-1. 格助詞・接続助詞の類

まず、便宜上、語形式に共通するものが多い格助詞・接続助詞をひとまとめにして見てみたい。それは、例えば「ヲ」や「ニ」は格助詞であったり接続助詞であったりするが、どちらも体言あるいは連体形に承接する。それが述語との格関係を表すようになるのか、また後続する文を引き継いでいくのか、そのような機能は、助詞がまずもって行う収束化の後に起こることなので、収束について述べるときに「格」助詞であるか「接続」助詞であるかを言う必要性はないだろう。重要なことは、助詞による収束化が行われるがゆえに、後にさまざま

まに意味機能が展開していけるのだという点である。

- (32) 見ますれば御出家同志の事で御座るに依て、一處に御座つたが能う御座る。(「宗論」)
- (33) さては無南阿み陀佛といふがそなたの名か。(「悪太郎」)
- (34) 人の川へはまったを笑止には思はひで、なぜに御笑らやるぞ。(「飛越」)
- (35) 近ごろ安い事成れども、此宿の入口に高札が有たをおみやらなんだか。(「地藏舞」)
- (36) 斯う見るに、知れぬ事を呼はつて歩行ば知るゝと見へた。(「佛師」)
- (37) 私の物で御ざるに依て、預るには及ませぬ。(「茶壺」)
- (38) 身を捨るといふて淵川へ身をすつてでは御ざらぬ。(「布施無経」)
- (39) 遠いから見た成らば番をして居ると思ふで御座らう。(「瓜盗人」)
- (40) 誠に世話に申ごとく、相撲のはては喧嘩に成り、博奕の果は盗を致すより外は無いと申が某も唯今は左様の手立成らでは致う様が御ざらぬ。(「子盗人」)

上記の例は準体法によるもので、助詞「ガ」「ヲ」「ニ」「デ」「カラ」「ヨリ」に承接しているものである。このような表現に助詞が付かないで成立することはなく、用言を承接する限りは、助詞による収束化でもって初めて文法的に整合性がつくのである。もっとも、用言が文中に用いられる場合、助詞による収束化でなくとも、形式名詞「コト」による体言化によってでもいいのであり、(38)と同じ述語「で御ざる」に承接している例で、

- (41) アゝかり初な事を致う事では御座らぬ。(「瓜盗人」)
 - (42) 若経を御存で御座るかと申事で御座る。(「腹不立」)
 - (43) たゞ腹を立いで正直なとさへ思召ば済む事で御座る。(「腹不立」)
- という「コト」を用いたものも存在するし、また、
- (44) 見共はそなたに逢ふて面目もない事が有る。(「麻生」)
 - (45) 扱あのとゝ様は人に珍しい物を振舞ふ事がすきで御座るが、こなたは何もめづらしい物は参りませぬか。(「岡太夫」)
 - (46) 又あの放生川は殺生禁断の所じやに依て、神を恐れて鳥をゐぬといふ事を寄合いて讀んだ歌じや。(「八幡の前」)
 - (47) 誠に、耕作と申物はいそがしい物で御座つて、毎日〽見廻に参らねば成らぬ事で御座る。(「水掛簪」)

という例を見れば、準体法によるものと比べて、形式名詞「コト」によって積極的に体言化することによって、名詞的概念の形成をはかろうとしているものであることがわかるであろう。

6-2. 係助詞・副助詞の類

ここでは現代語では副助詞ともいう「ハ」に焦点を当てる。虎寛本で準体法による表現が特に多く見られるのは「ハ」に承接するものである。全体を概観すると、「申す」「いふ」「おしやる」「思ふ」などの発言・思考の動詞に助詞「ハ」が付いたものが多い。

- (48) 誠に、花の都をふり捨て、越前へ下ると申は、本意には御座らねども、是もうき世のならひ成れば、是非もない事で御座る。(「塗師」)

- (49) 男と生れて女に打殺さるゝといふは、何共口惜い事じやが、何とした物で有らうぞ。
(「鎌腹」)
- (50) 扨今おしやつたは何事ぞと申ふしんでおりやる。(「佛師」)
- (51) 扨身共がおもふは、そなたや某が分として、此様な結構な座敷で連歌をする事は成まい程に、是に添發句をせうでは有るまいか。(「連歌盗人」)
- (52) 呼せらるゝは何事で御座る。(「金津」)
- (53) 私の存まするは、とかくこなたをあれへ同道致いて、こゝがあしい、かしこがあしいと申て、直いてもらひ度う御座る。(「佛師」)
- (54) 此跡で愚僧が法文を説くは惜けれど、こゝが宗論じや。(「宗論」)
- このように準体法による表現もある一方で、発言・思考の動詞を形式名詞「コト」が承けている例も見られる。
- (55) イヤ、上とうより一段被仰出た事はひるがへす事は成らぬ。(「三人夫」)
- (56) 御宿にさへ御ざつた成らば、をしへて被下ぬと申事は御ざるまい。(「庖丁聲」)
- (57) 某が宗ていの有難さは、南無妙法蓮華經と唱ふる事は扨置、御經を戴ても即身成佛は疑ひない。(「宗論」)
- (58) ムゝ最前からそなたの云事に一として是ぞと思ふ事は無いが、是は耳よりな。
(「宗論」)

このような発言・思考動詞における準体法の表現と形式名詞「コト」の表現とを比べてとくに、より一層、形式名詞「コト」が積極的に体言化をはかり、承接する用言を名詞的概念に形成しようとしていることがわかる。

また、特に発言・思考動詞以外にも「ハ」はさまざまな用言に承接する。

- (19) イヤ申、えぼし髪のむつかしいはこゝで御座る。(「麻生」)
- (59) そちが前に在るは酒蔵じや。(「三人片輪」)
- (60) こゝな者は。汝をつるゝは何の為じや。此様な時の為では無いか。(「井磑」)
- (61) イヤ、参る程に大な河へ出た。茶やのをしへたは定て此川の事であらう。(「薩摩守」)
- これらの例が、当時存在した形式名詞を用いて、
- (62) えぼし髪のむつかしいコトはこゝで御座る。
- (63) そちが前に在るモノは酒蔵じや。
- (64) 汝をつるゝコトは何の為じや。
- (65) 茶やのをしへたモノは定て此川の事であらう。

と言わなかったのは、そのような形式名詞を使って積極的に名詞的な概念を形成する必要もなかったし、また名詞的な概念になってしまつては、その表す場面の想起を誘う作用が半減してしまうからだと考えられるのである。

また、「ハ」と同様に係助詞である助詞「モ」による例も最後に挙げておく。

- (66) 扨加様にふと詞をかけ、同道致すも他生のえんでかな御ざらうぞ。(「宗論」)
- (67) 唯今参るも別成事でも御座らぬ。(「飛越」)

7. 現代語における準体法

以上で見てきたように、準体法による表現と、形式名詞「コト」で表す表現とは、そもそも表現意図にかかわる違いがあることを示してきた。前者は、その表す場面の想起を誘う作用を施し、決してその連体形は体言という一つの概念化されたものではないのに対し、後者は、まさしく体言化による一概念化である。文法上、準体法による連体形が体言であるかのごとく見えるのは、それに後続する助詞による収束力によるものであった。そして、現代語に至っては、かつて見られたような準体法は見られなくなり、特に格助詞に承接するものは、「見るのが」「見るのを」というように連体助詞「ノ」がなくては容認できないという状況にまでになった。

準体法の衰退は、助詞の持つ収束力の減退だと考えているが、この収束力についてはどうも助詞によって大小の違いがあるのではないかと考えている。それは、現代語にも数々の準体法もどき表現が残っており、しかも、それがことわざや格言のような一つの完結した言い回しではなく、生産的に作り出される言い方をも残しているからである。確かに、現在は「太郎と言うが私の名である」とか「鳥が飛ぶを見る」とは決して言わない。格助詞による準体法と比べて、副助詞による準体法は随分とその用法が残っているように思えるので、まず副助詞について以下に見ていきたい。

7-1. 副助詞

副助詞の代表的なものは、現代語において「取り立ての助詞」とも呼ばれる副助詞「は」「も」であろう。「取り立て」とは、前接する語句を全体の文脈の中で特別に引き立てているようにも解釈できることから付けられた名前であると思うが、この助詞の特徴の一つとして、連体形についたり、格助詞や動詞のテ形についたり、比較的語の承接に融通がきくという点が挙げられる。

(68) 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥

(69) そこまで行ったはいいけど、あとはどうするの。

(70) 確かに、雨は降りはしたけど、水不足解消とまではいかない。

(71) そちらへ行ってからは、係の指示に従ってください。

(72) 万が一、間違って伝わっては、申し訳ない。

(73) 置いて見るもよし、壁に掛けて見るもよし、さまざまな使い方があります。

(74) するもしないも あなたの気持ち次第です。

(75) 氏名はカタカナで書いてもよい。

(76) 氏名はカタカナで書いてはいけない。

「ハ」について言えば (68) (69) が従来の準体法によるものと見てもいいであろう。(68) の例は多分に慣用表現の性格が濃いと言えるが、(69) は「行く」以外の動詞でも可能であると思われる。もっとも、昨今の流れで「そこまで行ったのはいいけど」というように連体助詞「ノ」を置くのがより適切な表現だとする向きもあろうが、少なくとも口頭表現ではまだまだ聞かれる類かと思われる。「モ」については (73) (74) が準体法による表現で、(73) が、

「良い」という意味の形容詞に「よし」と言っているところからも、多分に慣用表現的な性格を持っていることは否めないが、(74)では「モ」に承接する動詞はいくらでも互換が可能な表現であろう。また(75)は「～してもよい」という許可を表すもの、(76)は「～してはいけない」という禁止を表すもので、一つの慣用化された文型であるが、慣用表現とは言え、ここで他にもない「ハ」「モ」が用いられるていることは偶然とも思えない。

このように現代語に「ハ」「モ」の準体法による表現が多く残っているということから推察して、恐らくそれは、助詞「ハ」「モ」がもつ収束力の強さを反映しているのではないかと考えられるのである。収束力の強さは、連体形のみならず(70)(71)(72)のように動詞の連用形や、格助詞、助詞の「テ」がついたものまでに承接していることからもうかがえる。動詞の連用形や格助詞、助詞の「テ」は、基本的には述語にかかっていくものであり、まさにこれから展開しようとする語形である。このような形のものにまで収束作用を及ぼせるということは、この助詞の収束力の大きさが如何に大きいかを示すものだと言ってもいいのではないだろうか。

その他のかなりの副助詞についても、連体形を承接するものが多い。

- (77) ～するより仕方がない、～するまで、～するだけ、～するばかり
 ～するでもない、～するしかない、～するやら、～するなり
 ～するほど、～するくらい

副助詞は格表示を越えてさまざまな意味を添える助詞であるが、その助詞の収束力ゆえに、意味の添加にもそれだけ影響を及ぼし、昨今では「取り立ての助詞」とまで呼ばれるようになったと言ってもいいかもしれない。その統語的な力の強さは、今もなお、準体法による語形式が多く成り立っていることから証明されるのではないと思われる。

7-2. その他の助詞

副助詞以外では、まず「二」に承接するものが多いことに気づく。もっとも今日では「二」の前に連体助詞「ノ」が用いられる場合もあり、いずれは、下記の(78)のような表現は「ノ」のある表現と比べて「少し古くて」「堅い感じ」のある表現として認識され、次第に「古語」の如き扱いになり、やがては、「咲くを見る」が言えないのと同じぐらいに許容度が下がっていく運命にあるのかもしれない。

- (78) ～するにしたがって、～するに限る、～するに越したことはない
 ～するにつけても、～するにしても、～するにせよ
 ～するには、～するにも

また、助詞の収束力という意味で、最もそれを如実に表すものは、疑問の助詞「力」、引用を表す「ト」であることは既に第3節でも触れた。

- (5) 今日は何時に帰って来られるかわからない。
 (6) 着いたら連絡をすると言っていた。

特に「ト」は、引用という機能からして、ありとあらゆる形のもを承接することから、助詞の中でも最も最高位に属するほどの収束力を持っていると言ってもいいかもしれない。

このような「力」「ト」に関連する表現は(79)に示すとおり、他にもいくつか見られる。

(79) ～するともなく、～するとして、～するとはいえ、

～するかどうか、～するかもしれない、

ところで、「力」については、この助詞のもつ収束力の強さを考えれば、日本語の疑問文(質問文)を形成する際のようにすくなく説明することができる。つまり、「はい」か「いいえ」で答えを求める真偽疑問文の場合、(80)のように「力」に丁寧さを表す形式を付けて「ですか」「ますか」とすれば万人の使用に堪えられるのに、(81)のごとく普通体(特に丁寧さや敬意を表さなくてもいい文体)では、文末の動詞に「力」を添えただけでは非常に不安定なのである。

(80) 明日は学校に行きますか。

(81) 明日は学校に行くか。

つまり、(80)が、男女問わず口頭表現として汎用性のある文型であるのに対して、(81)は、男性的表現、ぞんざいな、詰問するような表現として用いられるという傾向がある。一般には、普通体で質問をする場合には「力」を避けて、

(82) 明日は学校に行くか？(「？」は上昇調イントネーションを表す)

とするのが常であろうと思うのだが、「力」という疑問を表す助詞がなぜ、こともあろうに疑問文で使われるためらわれるのか。このことは次のような疑問語疑問文の例を検討したときに原因がはっきりと見えてくる。「なに」「いつ」「どこ」という不確定要素を問う疑問語疑問文では、やはり普通体に付く「力」は、上昇調イントネーションをとまなっている疑問文として機能しないのである。

(83) 今度いつ学校へ来ますか。

(84) *今度いつ学校へ来るか？(*は非文であることを示す)

ところが、非文である(84)は、従属節中に用いられれば成り立つ。

(85) 今度いつ学校へ来るかわかりません。

以上のことから考えられることは、助詞「力」は他の連体形を承ける助詞と同じように、まず、承接する用言を収束することが主たる機能であること、それに加えて、未定や不確定といった助詞固有の意味機能を示しているのだということである。つまり(84)のようなことが起こるのは、「力」でもって前接するものを承け、そして他の助詞と同様、後続する述語にかかっていこうとするのだが、その述語を示すところがない。それで、(85)のように「わかりません」という述部に導かれているものは的確なのであるが、そうではない(84)は非文となるのだと考えられるのである。

8. おわりに

以上で考察してきたことをここで簡単にまとめてみたい。

用言の連体形に助詞が承接する準体法は、その助詞の持つ収束力によって体言化されるのであり、初めから連体形そのものが体言であるわけでない。つまり、「咲けるを」と言うのは「咲ける」という体言が助詞「ヲ」にかかっているのではなく、「咲ける」は最後まで用言の

資格であって、それが後に体言と見なされるのは、助詞が付くからである。この理由の一つは、古代語においても用言を体言化する形式名詞「コト」が準体法とともに併用されていたという事実が挙げられる。そしてさらに、狂言資料における多様な「コト」の使われ方からわかった「コト」の持つ傾向より、「コト」には「コト」の積極的な存在意義があったと考えられるからである。

また、準体法の助詞による収束化と、形式名詞「コト」を使った体言化は、結果的には構文的によく似た性質をもつものであるが、それぞれに固有の表現意図が反映されていると言える。準体法の場合は、その表現効果を「場面の想起を誘う」という言い方で説明したものである。また、形式名詞の場合は、いわゆる今日普通に言うところの体言化にあたるものであり、用言を、それ以上展開しない、構文上一つのまとまった名詞的概念に形成しようとする意図的操作である。

助詞の収束化という機能は、今日においてもなお、生産的に作り出せる多くの準体法的な表現が存在することとも関係がある。特に副助詞は助詞の中でも収束力が比較的強いと言うことによって、現代語のいくつかの言語現象をもうまく説明することができる。

また、本稿では十分に扱うことはできなかったが、この助詞の収束力というのは、すべての助詞が原則としてもっている基盤のような機能だと考えている。つまり、格助詞や副助詞に限らず、接続助詞、終助詞についても、それらが果たしている意味機能は、収束という機能によって整えられたものだと考えられる。

例えば、接続助詞の「ガ」であるが、

(86) ゆうべは雨が降っていましたが、たくさんのお客さんが足を運んでくれました。

(87) 私は鈴木と申しますが、出身は関東の方で、大阪弁には苦勞しています。

上記の (86) は、いわゆる逆接を表すもので、一般の論理的な思考の流れとは逆行した内容の意味を示しているのに対して、(87) は話しの流れを続けていく際に用いられ、話しに順行して事柄の添加を行っていくものである。同じ「ガ」という助詞に承接しているのに、このような逆行と順行という、一見すると相反するようにも見える意味の差は、一体どこからうかがえるのか。それは、ひとえにその発話場面や前後の文脈からでしかありえない。その証拠に、「ガ」に承接するものを (86) と同一にして、

(88) ゆうべは雨が降っていましたが、どのようにお過ごしでしたか。

とすると、この「ガ」はもはや逆接ではない。ということは、この「ガ」自身に逆接とか添加などという意味機能が初めから備わっているとは思えないのである。つまり、このような意味機能は、前接する用言を収束することが主たる役目である助詞にとっては、全く与り知らぬところのものではないかと考えられるのである。

しかしながら、機能語の最たるものである助詞は、前接するものを収束化し、それ以上は展開しない一まとまりの概念にする、これが構文上の役割であるというのはいいいとしても、実際は、我々はその文を逆接の意味だとか、あるいは添加の意味だとか理解することができるのである。では、それはなぜなのか。

その他、さまざまなことは稿を改めてということにして、今後の課題としておきたい。

引用文献

- (1) 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館出版.
- (2) 柳田征司 (1993) 「無名詞体言句から準体助詞体言句(「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」)への変化」愛媛大学教育学部紀要第Ⅱ部人文・社会科学. 第25巻第2号.
- (3) 渡辺 実 (1971) 『国語構文論』塙書房.
- (4) 信太知子 (1976) 「準体助詞「の」の活用語承接についてー連体形準体法の消滅との関連ー」『立正女子大國文』5.
- (5) 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味ーその1ー」大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』第4号.
- (6) 近藤泰弘 (1981) 「中古語の準体構造について」『国語と国文学』58巻5号.
- (7) 鈴木 浩 (1990) 「天草本・国字本兩伊曾保物語における連体形準体法に関する覚書ーヲ格のものについてー」『明治大学日本文学』18. 明治大学日本文学研究会.
- (8) 莊司育子 (2001) 「狂言資料における形式名詞「コト」に関する一考察」大阪外国語大学留学生日本語教育センター『日本語・日本文化』第27号.
- (9) 西尾光雄 (1977) 「準体言の用法」『東京女子大学紀要論集』第28巻1号.
- (10) 信太知子 (1987) 「『天草本平家物語』における連体形準体法についてー『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討などー」『近代語研究』第7集. 近代語学会編. 武蔵野書院.
- (11) 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』上 大修館書店.

使用テキスト

『大蔵虎寛本 能狂言』上・中・下 (全三冊) 岩波文庫
日本古典文学大系『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『万葉集』

(2002.1.30受理)